



薬店 (くすりだな)

9月30日
Sudden Fiction Project

高階経啓
hirotakashina

9月30日のおはなし「薬店（くすりだな）」

引き戸を引いて店に入ったときから様子は変だった。由緒ありげな日本家屋のほの暗い空間に踏み入れると、しかしそこには商品も何もなく、ただがらんとした中に勘定場というのだろうか、ちょっとした座卓があって、上品そうな和服の女性が座っている。年の頃は60前後くらいで、柔和な微笑みを浮かべて丁寧に頭を下げる。

「ようおこしやす」

「あ。どうも」

「お客さんどちらから」

「どちらから？」

「あ。東京から、です、けど。はい」

東京にいるのに東京からという返事も妙なものだ。

「どこかお悪いところでもありはるんですか」

「はあ。あの」これは京都弁なのだろうか。少し妙な気もする。「わたしではなく、母が」

「あらまあお母はんが、そりゃまあえろう心配どっしゃろなあ」

芸者言葉か？ 何なんだこの店は。

「あの、漢方のいい薬があると聞いて」

「わたしどものでよろしければ、そりゃあもうお手伝いさせていただきますけど」

「目なんですけどね。かすむって言うんですよ。でも医者に行っても特に問題ないって言われるし」

「あら。かすみ目やったら、お客さん、ちょうどええのがありますわいな」

ありますわいな？ ここは東京だよな。

「効くんですか」

「はいほんに、みなさん喜んでお求めにならります」

「それはいいですねえ」他の客も喜んで買うというならものは確かだろう。「そのお薬の名前は
何て言うんでしょうか」

「『安本丹』言いますんえ」

アンポンタンと聞こえた。

「アンポンタン、ですか」

「はあ。『安本丹』どす」

「それは何というか」

「はあ、やさしゅうて、はんなりした響きの言葉どっしゃろ？」

「え？ あ。ああ。まあ。そんな感じもあるにはある、というか」

「かすみ目にも坐骨神経痛にも凍傷にも耳鳴りにも鬱病にもEDにも」

「あっかんあかん！」突然奥から柄の悪い中年男が飛び出してきた。「そなんやったらあか
んで。あかんねんて。せやからアンポンタン！ちゅうんや！」

ひるんで立ちつくすわたしにぎらぎらした目を向け、低くよく響く声で男は言う。

「えらいすんまへんなあ、お客さん」

短く刈り込んだ髪。開襟シャツ。そしてわたしの目に間違いがなければこれは1970年代末期に咲いた時代のあだ花、省エネルックのスーツ姿。夏場でも驚いただろうが、ましてやいまは厳寒の季節だ。店の中だってさして暖房が効いているわけではない。言わせてもらえば外より寒いくらいだ。いったいどうなっているのだ。

「とんだ不手際ですんまへんなあ」

「いえ。別に。何も」

「婆さんには店番を頼んでるだけやのにほんま勝手にお客さんの相手さらしよってからのこの糞
ばあが。何や失礼なこつたら言わしまへんでっしゃるか。あれお客さんどちらから？」

どちらからはお前らだろうが。

「東京ですが」

「はあそらもう大変なところから」男は心ここにあらずという風に呟くと続けた。「ほんで、ど
こがお悪いんでっしゃろな」

「いえわたしではなく母が」

老婦人が口を開いた。

「かすみ目にも坐骨神経痛にも凍傷にも……」

「だまりくさらんかいこのアンポンタンのぼけ茄子唐変木が！ おめこから腕突っ込んで指人形にしてポルシカポーレ踊らせたるかワレ！」

「どうやってこの店を出るか、それだけに集中しよう。」

「あの、今日はもう」

「あ。お客さん、茶アも出さんと、すんまへんなあ」これが猫なで声というものだ、と解説を付けたくなるような声で男が言う。「そうでっかそうでっかご家族が。そりゃ心配でっしゃろなあ」

「いえもうあの」後ずさりしながら出口に近づく。「本当に今日はもう」

その途端がらりと引き戸が開いて、かくしゃくとした老人が現れ大音声で呼ばれる。

「何を騒いでおるか！」鼓膜が破れそうだ。「おおこれはこれは客人がおられるというのに、いたずらな大声を出してしまった。堪忍してつかあさい」

つかあさい？ つかあさいと言ったのか、この老人は。

「うん。その人には『安本丹』がよい。間違いない。お客さんにも効くな。いい加減なことを言っとるんじゃない。お客さん、いびきがひどいじゃろう」

当たっている。確かにいびきに悩んでいる。ということはこの老人はちゃんと見立てられるのだろうか。

「睡眠時無呼吸症候群！」老人が吼える。「『安本丹』は首から上の神経症状にことのほかよくききますわい」

わかった。とにかく少し買おう。そうすれば店から出られる。

「あいや待たれい！ しばらく！ しばらく！」

奥の方から、飛び六方を踏みながらざんばら髪を振り乱した赤面の男が飛び出してくる。

* * *

「マスター、お客さん、起きませんね」

「ネーミングがよくなかったかな」

「っていうか、よくわからないのに漢方薬なんか入れるから」

「封印だな、このカクテルは」

(「安本丹」 ordered by izumi-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブックログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただけると大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできるのですが、面と向かって星をつけるのはひよっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験

済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上げてまいりましょう。

薬店（くすりだな）

<http://p.booklog.jp/book/35032>

著者：hirotakashina

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/35032>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/35032>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.